

# 介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要	利用者	: 90歳代 女性 要介護1
	利用期間	: 令和4年 5月～長期入所をご利用
	病 名	: 慢性心不全、慢性腎不全
	既往歴	: 骨粗鬆症
	経 過	: 高齢で虚弱ながらADLは自立していて、畑仕事をしながら長男と二人暮らしをされていた。長男がご逝去されて一人暮らしとなると、心労で食事がとれなくなり、入院。退院後は近所に住む親戚が三食届けるなどの援助とデイサービスを利用して生活されていたが、持病もあり、離れて住む親族が心配し施設入所となる。円背強度だが杖歩行自立。認知機能は保たれている。

## 内 容

---

半年前までは自宅で自立した生活を営んでおられた利用者さんは、初めての施設生活に不安と戸惑いの色が伺えました。また、入所に当たり離れて住むご家族も「母は人のために働くことを喜びとして生きてきました。施設に入ることで気持ちの張りがなくなってしまい、かえって弱ってしまうのでは」と心配され持ち物の中に利用者さんの趣味である裁縫道具の持ち込みを希望されました。

利用者さんの不安を取り除くには、何をしたら良いのか入所スタッフや作業療法士を中心にチームとなり検討しました。その結果、趣味である縫い物を活用し、ご家族がおっしゃっていた「母は人のために働くことを喜びとしていた」の言葉より生活の一部に作業を設定することで、利用者さんにとっての参加の場と役割が自覚でき、主体的な活動が生きがいにつながる事を目標としました。

私達は、まず初めに作業療法士による作業能力の評価を行いました。利用者さんは片目が見えない状態ですが、布をお渡しするとメガネも使わずに針に糸を通し、集中して作業に取り組みられました。手慣れた様子で雑巾を縫い上げ、完成後にはとても自信に満ちたお顔を見せてくださいました。

次に、看護・介護スタッフと共に針やハサミなどの危険物の管理を検討し、他の利用者さんの行き来の少ない談話室に作業場を設け、スタッフが見守りをする中で自力で作業をおこなえる環境を提供するようように申し合わせました。

私達は、実用的な普段使用する物を作っていたいただき、使用の感想や感謝を伝えられるよう、各部署に縫っていただきたいものがあるか呼びかけたところ、雑巾、クッションへのネーム付け・紐付けのほか、

栄養課からは「調理作業に必要な鍋つかみを作っていただけないか」との要望がありました。利用者さんに相談すると、数日のうちに4枚完成されました。ご本人から職員に直接手渡ししていただいたところ、職員からの感謝の言葉に、とても穏やかな優しい笑顔を見せてくれました。尚、お手製の鍋つかみは、翌日から厨房で活用させていただいております。

入所当初は遠慮や不安もあり、下を向かれていた利用者さんは、今はお疲れを心配する職員をよそに「毎日やりたい」と意欲を示され、ご自分から仕事を催促されるようになりました。引き続き、雑巾づくりなどの縫い物に取り組まれています。

同時に、これまで20年来習慣として行っていた体操も再開されるなど表情は明るく自発的に活動されております。これまで人の為に働くことが喜びであった利用者さんが施設生活の中でも誰かの為にやりがいを持ち取り組まれている姿はキリリとした姿の中に優しさが滲み出ております。施設生活の中でもご自分の役割や必要とされること また何よりも誰かの為に行うパワーはより一層の輝きを作り出すことを感じさせてくれた症例です。